

科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820056

研究課題名 (和文) 糖尿病の臨床試験に関する比較民族学的研究

研究課題名 (英文) Comparative Ethnography of Clinical Trials

研究代表者 モハーチ ゲルゲイ (MOHACSI GERGELY)

慶應義塾大学・先導研究センター・研究員

研究者番号：90587627

研究成果の概要 (和文): 治療のさまざまな人工物に対する人類学の比較的新しい関心が示しているように、生物学の数値と人間の価値観は、対照的に異なるものではなく、むしろ差異の連続体を成すのである。本研究では、こうした医療実践そのものにおける主体と客体の差異化の過程を記述・分析するために、糖尿病などの医薬品の臨床試験をめぐる、日本とハンガリーとの比較調査を実施してきた。その成果について国内外の学会で発表し、論文集や学術誌に掲載した。さらに、複数の共同研究との連携をもとに、2012 年以降本プロジェクトの調査範囲をアジアの諸国に広げていくことが可能となり、比較研究としての人類学の方法論を再検討することが期待されている。

研究成果の概要 (英文): The relatively new anthropological focus on the technological encounters in medicine suggests that biological and human values are continuous rather than categorical. In my research, I have attempted to describe and explore this process of differentiation between subjects and objects in medical practice by comparing clinical trials of diabetes medications in Japan and Hungary. The results of the research have been presented in various conferences in Japan and abroad, and published in academic journals and edited books. As part of multiple collaborative projects, since 2012, the geographical scope of the study has been expanded to include Asian countries, with the general aim of re-examining the comparative method in anthropology.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	830,000	249,000	1,079,000
2011 年度	1,060,000	318,000	1,378,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,890,000	567,000	2,457,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：糖尿病、臨床試験、科学技術社会論 (STS) 比較研究、日本、ハンガリー

1. 研究開始当初の背景

治療のごくありふれた人工物は、21世紀幕開けの日本を特徴づける慢性疾患の増加、医療制度の変化や高齢化などの進展において重要な要素を占めているのである。グローバルな問題として注目されつつある糖尿病その最たるものである。苦痛のような症状から始まる身体の「感覚」でもなく、医学的に簡単に客観化され得る「論理」でもない。そうではなく、むしろ血糖値の測定や健康診断という医療実践、つまり人間と技術（診断機器、医用画像データ、医薬品等）の複雑な関係に埋め込まれているのである。

医療技術がこうして普及する科学的根拠に対しては、社会学や生命倫理等の多くの研究者によって、批判や賞賛の意見が表明されている。またこれに対して、民族誌の手法を用いる医療人類学者たちが、慢性病を生きる人々の文化的経験から生じる多様性を主張している。しかしながら、治療のさまざまな人工物との遭遇では、科学と生活がいろいろな形で交錯し、生物学の数値と人間の価値の連続体を成すことが見えてくる。

こうした慢性疾患の自己管理にみる、テクノロジーの分布と社会の分化における相互関係について、申請者は博士論文「TECHNOLOGIES OF DIFFERENCE: Diabetes, Medical Practice and the Politics of Life in Contemporary Japan」(仮題)で人類学の視点から総括している。そこで見えてくる、人々の差異が身体的な蓄積において、糖尿病治療の場で扱われている診断機器、薬剤などが果たす媒介としての重要な役割は、創薬の現場に焦点を当てた本研究の背景となっている。

2. 研究の目的

医療実践そのものにおける主体と客体の差異化(differentiation)をめぐるプロセスは、近年の(医療)人類学と科学技術社会論(STS)の境界領域で行われる有意義な対話の主なテーマとなった。申請者の研究はこうした理論的な枠組みに立脚し、医薬品を含む医療技術の「ユーザー」として現れる糖尿病患者を中心に、文化と科学のインターフェースに位置している存在を総括することを志した。この検討の対象にした臨床試験の場は、生活の質(QOL)における正常と異常を人格化する医療技術がはじめて公的空間に入る組織である。このようにして博士論文研究の観点を医療技術が使われる場から、その技

術が形成される場へ移し、生物学と生活の相互関係を解明することにより、現在の日本社会にみる論理と感性の相互作用について、比較研究の方法論を用いて肉付けすることを目指していた。

3. 研究の方法

上で述べた目的を達成するには、次の3つの手段が用いられた:(1)文献調査、(2)フィールドワーク、(3)比較民族誌。そこで、ある病気と長期にわたって付きあわざるを得ないという状況が、医療技術が分散する知識をとおして、一生飲み続ける薬に意識を向け、さらに他の人間との関係性を再構成するきっかけともなることに重点をおいて考察を進めた。

(1)まずは、創薬の歴史的変遷や現状を把握するために、医療史や臨床科学の文献による確認作業の上で、人類学や民族学の事例研究から見えてくる日本と海外の違いを視野に入れながら分析を行ってきた。

(2)の民族誌的なフィールドワークにおいて、糖尿病のさまざまな医薬品の開発に関わる臨床試験を参与観察の方法を用いて探究した。東京都と高知市合わせて3つの医療施設で、糖尿病薬等の治験の参与観察を行い、医学的な知識を蓄積するプロセスの現場において、個々の患者の異なる生活世界や体験は、いかに糖尿病の科学的知識を再構成するのかを調べた。また札幌市と東京都で、製薬会社や医薬品開発業務受託機関(CRO)への聞き取り調査及び資料収集を実施し、糖尿病薬の開発競争における「科学的なもの」と「経済的なもの」の差異化を裏付ける実証的データを獲得した。

(3)こうして日本でのフィールド調査で得られた結果をより広い文脈の中で理解するために、治験の多種多様な現場で行われる比較実践を分析し、さらに日本とハンガリーの現状を人類学の視点から比較検討した。一方では、Drug Research Centerという治験施設支援機関(SMO)の地方病院で3週間に渡って糖尿病治験の参与観察を実施した。またこれに加えて、首都ブダペストで、その他の医薬品開発関連機関で現地調査を実施した(平成23年8~9月)。

さらに、上記の実証的なデータを糖尿病研究の文脈の中で特定するために、従来の日本国内の地方病院を対象とした民族誌的フィールドワークを展開し、国内外学術集会(第54回日本糖尿病学会、札幌; 5th Annual Biopharma Asia Convention, Singapore)への参加により、情報収集を行い、研究者、製薬会社、患者のネットワークを追跡してきた。

4. 研究成果

創薬および臨床試験の実践を、文化と技術の相互関係の視点から描き出すことを目指した本研究は、その目標を達成した上で、文化人類学研究に必要な比較のツールの再検討についても学術論文などで貢献しており、調査と共同研究の両方のレベルで国際的なネットワークに参加することができた。その成果は具体的に下記の3つに分けられる。(1) 課題の整理：医療技術との遭遇における論理と感性の関係；(2) 事例研究：創薬と臨床試験に関する比較民族誌；(3) 方法の再検討：「ポストプルーラル人類学」の構築。

まずは、博士論文の研究テーマを展開しながら、糖尿病治療の現場で増殖している自己管理の医薬品を通じて、論理と感性をめぐる学際的な議論に、比較（または通約 = commensuration）の視点から新たな解釈を加えた。ここで人間と非人間の多様性が互いに関係しあい、影響しあうことに着目し、人間と科学の複雑で動的な相互干渉に取り組む人類学の可能性を実験的に模索し、日本語で論文を発表してきた（「雑誌論文」及び「図書」を参照）。

こうした課題を具体的に追究するために、本研究の主な成果として、平成23年度からフィールド調査を開始し、糖尿病のさまざまな医薬品の開発に関わる臨床試験の現場で行われる比較の効果を明らかにした。この問題に関しては、マリリン・ストラザーンによる関係論（relationality）及びアンネマリー・モールなどの実践論

（praxiology）を踏まえたうえで、医療介入の主体と客体を互いに引き立てる薬剤の役割を解説してきた。医薬品の評価を実際に行っている臨床試験において、患者の多様な生き方や経験を、普遍性を求める医学の限界ではなく、治験薬の効果として分析し、批判的医療人類学に代わる新たなアプローチを提供した。

糖尿病薬の効果を評価するには、自らの体を科学的に経験できるという患者、いわば「再帰的な病人」が不可欠である。患者が自分の症状に対する感覚を研ぎすませば研ぎすますほど、医師及び企業が薬の効き方の論理を突き止めることができるのである。「モノ（ここでは薬）を通じて考える」という民族誌の独特な方法を用いながら、こうした二つの比較が絡み合うことに焦点をあてつつ分析を進めてきた。その予備段階の結果について、110th Annual Meeting of the American Anthropological Association や 5th Annual Biopharma Asia Convention などの国際会議で発表を行い、また

分担執筆の著書にまとめた（「学会発表」と、「図書」「雑誌論文」を参照）。

上記と並行して、こうして日常的に行われる比較の実践を、人類学者のフィールドワークにおける比較と併置し、存在論的な展開を図るための方法論を築く国際共同研究に貢献することが可能となった。このプロジェクトの枠組みにおいて、多様な事例研究を踏まえて描き出す、いわゆるポストプルーラルの世界を把握することが目的であり、本研究の成果を比較の方法論を再検討するために用いることが可能となった。ここで得られた成果は、大阪大学で開催された国際シンポジウム Translational Movements: Ethnographic Engagements with Technocultural Practices で発表され、また国際学術雑誌『East Asian Science, Technology and Society』で特集として、現在査読中である（「雑誌論文」と及び「学会発表」）。

また、本研究で実施された臨床試験の比較民族誌の調査範囲をアジアの諸国に広げていくことを現在実施中であり、調査成果のさらなる進展が期待されている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

MOHACSI Gergely, The Adiponectin Assemblage: An Anthropological Perspective on Pharmacogenomics in Japan. *East Asian Science and Technology Studies* (under review - accepted) (査読有り)

MOHACSI Gergely and Morita Atsuro, Traveling Comparisons: Ethnographic Reflections on Science and Technology. *East Asian Science and Technology Studies* (under review - accepted) (査読有り)

モハーチ G、「代謝を生きる—移動性をめぐる実験的考察—」『文化人類学』76(3): 88-307, 2011. (査読有り)

モハーチ G・森田敦郎、「比較を生きることについて—ポストプルーラル人類学へ向けて」『哲学』第125集、pp. 263-284、慶應義塾大学出版、2011. (査読有り)

〔学会発表〕（計5件）

MOHACSI Gergely, Comparing *Gamar*: On Good Food and Endurance in a Japanese Collective of Diabetes Patients – Paper to be presented at the East Asian Anthropological Association Conference, Hong Kong, July 6, 2012.

MOHACSI Gergely, Translating

Evidence: A Cross-Cultural Comparison of Diabetes Trials – Poster presented at the 5th Annual Biopharma Asia Convention, Singapore, March 20, 2012.

MOHACSI Gergely and Morita Atsuro, Translational Movements: An Introduction – Paper presented at the International Symposium Translational Movements: Ethnographic Engagements with Technocultural Practices at Osaka University, Osaka, March 3, 2012.

MOHACSI Gergely, Comparative Effects: Developing Drug Therapies in Hungary and Japan – Poster presented at the 110th Annual Meeting of the American Anthropological Association, Montreal, November 17, 2011.

MOHACSI Gergely, Logical artifacts and sensible bodies: on mediating alterities in diabetes care – Poster presented at the International Symposium Toward an Integration of Logic and Sensibility – from Neuroscience to Philosophy at Keio University, Tokyo, September 14, 2011.

〔図書〕(計2件)

MOHACSI Gergely, Entangled Knowledges: Three Modes of Articulating Differences in Clinical Trials. In CARLS Series of Advanced Study of Logic and Sensibility. Vol. 5., 232-244. Tokyo: Keio University, Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility, 2012.

モハーチゲルゲイ、病気の通約——血糖自己測定の実践における現実としての批判」『現実批判の人類学—新世代のエスノグラフィへ』春日直樹編、pp. 203-224、世界思想社、2011。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

モハーチ ゲルゲイ(MOHACSI GERGELY)

慶應義塾大学・先導研究センター・研究員

研究者番号：90587627